

『サヨナラ・リアル』

著：朝丘 辰

ill：問

恋する鳥は空を飛べない

うちの男子校には、美術準備室に長時間いると窒息死するという噂がある。

「……日が沈むまでここにいたら、先生と一緒に死ねるかな」

絵の具や本の匂いが充満する狭い室内に、金色の夕日がさしている。中央にある長机の端につつ伏した体勢で、その日ざしのなかにただよう無数のほこりを眺めていると、ふいにうしろから後頭部をはたかれた。

「吉沢。ばかなこと言ってないで、ほらこれ」

目の前にばさっとノートを放られてまたほこりが舞いあがり、思わず身体を起こす。美術部の日誌だ。部長の俺が書くことを義務づけられている、活動報告書のようなもの。

「しつこいようだけどな、吉沢。日誌には部活動中になにがあったかだけ書きなさい」

「そうしてます」

窓脇にあるデスクの椅子に腰かけた高岡先生が横目で俺を睨んでくる。口での反論はなにもなく、数秒間見つめあったのちに、先生は前へむきなおってなにやら仕事を始めた。

俺も日誌をひらく。

部長をひきついだ今年の春に新調されてから約五ヶ月。日誌は使用ずみのページがすっかりよれている。俺の報告の下に先生が緑色のペンでコメントをくれるのだが、おたがい下敷きをつかわないせいで筆圧でおうとつがついているのも原因だった。

『今日は水張りをしました。全員で好きな絵を描いて、来月の文化祭で展示する予定です。

背中の中を描かせてくれと何人かに頼まれて困りました。

先生、あのとき俺のこと呆れてましたよね』

昨日書いたこの報告の返事には、『ご苦労さまでした。文化祭まで時間もないので部長も部員の指導をお願いします』とある。いつもどおり個人的な質問は無視されていてそっけない。

鞆からシャープペンをだして今日の報告を書こうしたら、「吉沢」とまた声をかけられた。

「日誌は持って行っていいから家で書きなさい。お疲れさま、気をつけて帰るように」

俺の座っている場所から、窓辺のデスクにいる先生はうしろ姿しか見えない。書類を忙しくめくっているスーツの背中と、乱れた髪に、刻一刻と色を変えていく夕日が斜めに降りて、明るく照らしている。

無言の、絶対的な拒絶を感じる。

「例の噂のこと、心配してくれてるんですか」

違うとわかっていて、それでも訊いた。

「噂？ なんだそれ」

.....やっぱり。

「この部屋にいと窒息死するらしいって、みんな言ってますよ」

「あー.....そういえばそんなのあったな。毎日ここで仕事してぴんぴんしてる俺も、そのうち死ぬのかねえ」

嘲笑まじりの返答のなかで“死”という単語だけが不穏に響いた。

「先生が死ぬときは、俺も一緒にいさせてください」

ちら、と半分だけふりむいた先生が、辟易したように目を細める。

「おまえらはなんでそう死ぬ死ぬ言うのが好きなんだか.....格好いいと思うの？ わけわからん方向に熱いよな」

二十八歳の先生と十七歳の自分のあいだに、厚い壁をはられたのがわかる。

「俺は学校の縛りがないところへ先生といきたいだけです」

「ばかな話はそこまでにして帰りなさい」

先生の視線が一瞬、俺の背中の中へうつった。

「天国だろうと地獄だろうと、吉沢とはいかないよ」

再び前をむいて仕事を再開した先生が、目で見てより途方もなく遠くにいる気がする。追えば追うほど遠のいていくことは、もう承知していたのに。

「でも、先生がいる場所は俺にとって天国なんです」

心が安らぐ唯一の場所。一年前から、お世辞も嘘も愛想笑いも必要ない、正直な自分でいられるのがここだけだった。

「何度も言うけど、」と先生が重く長いため息を洩らす。

「吉沢は部長だし、部の仕事はてらちょっとガス抜きにくるのはかまわない。ただ、それ以上の期待には応えないからな。わかっておけよ」

冷然と言い放つ先生の艶のあるうしろ髪を見つめて、奥歯を噛みしめる。先生の前で自分は無価値な子どもで、大勢の生徒のなかのひとりにすぎない。

「.....日誌だけ書かせてください」

声を押し殺して頼んでも、「日誌だけな」と淡泊にあしらわれた。

深呼吸して、胸の痛みが落ちつくのを待ちながら芯の先をノートにつけた。今日あったことをふり返る。

—なんか九月なのに風冷たくて、急に冬みたいじゃね？ 外行って描くのだりいな〜.....なあ真白、やっぱおまえのこと描かせてくんない？ 羽綺麗で絵になるしさー。

—ずりーぞ、俺も真白描きてーわ。羽って天使ちゃんって感じでいいよなあ〜。ははは。真白お、どうしても駄目？

囁きたてられて、俺は『悪い、遠慮しとくよ』と苦笑したんだったか。

笑いながら迫ってきたふたりは同級生だが美術科の生徒で、普通科の俺はクラスも違うからどんな性格なのかほとんど知らない。冷やかしくともとれるああいう態度に愛想よく返して波風たてずにすませるのは、他人とつきあっていくうえで当然のことだと思う。なのに内心苛々して、ときどきひどく息苦しくなる。

「寒いなら防寒していけばいいだろ。しつこいと嫌われるぞ。」

さりげなく助け船をだしてくれたのは先生だった。

『今日も文化祭の絵の続きを描きました。外へ写生に行く部員が多く見受けられます。

F15号の大きなキャンバスはなかなかの強者で、完成まで時間もかかりそうです。

みんな美術科の生徒だから、なかには「授業とおなじで飽きる」と愚痴る人もいました。

来年は絵の展示じゃないほうがいいかもしれません』

「高岡先生は、文化祭でなにをするんですか」

文字を書く手をとめて訊ねてみた。

「ああ、今年もクラスの出店手伝うよ。焼きそばだったかな。あとは見まわりと」

「去年はたこ焼き、先生が作らされてましたね」

「生徒がさぼるからな」

「またいきますね」

書類をおいて書きものを始めた先生が、左手で後頭部を掻いた。

「吉沢はどうしてそうなっちゃったんだろうな……」

「そうってなんですか」

問い返しても、何事もなかったかのように仕事を続ける。

“どうして教師に惚れたりしたんだろうな”という意味なんだろうが、自分から恋愛話をふったくせにこちらが踏みこもうとすると黙りを決めこむ先生が憎い。

「先生がたったひとりの理解者だからです」

しかたなく自分からこたえた。

「安心しろ。吉沢をわかってくれる奴ならこれからも何人だって現れるから」

「一番初めに会った先生に意味があるんですよ」

訴えたら、「あのな、」とうんざりしたように制された。

「“理解されて嬉しい”っていうのは、イコール“好き”じゃないんじゃない？」

「え」

「吉沢が好きなのは要は自分なんだよ。自分を理解して愛して可愛がってほしいだけ」

「違います俺は、」

「なに？」

「俺は……」

反論したってきつとまた無視される。歯噛みして言い淀むと、先生は喉で小さく笑った。

「もし万が一、卒業して五年経ってもいまとおなじ気持ちでいたならもう一回おいで」

先生の声音は、俺が絶対に戻ってこないと信じきっている響きをしていた。こっちを見ようともしない背中を照らす日ざしが、薄暗く沈んでいく。

ペンを握りなおして、いま一度日誌に文字を書きつづった。

『何年経っても先生を忘れることはありません。ずっと好きです』

一軒家の自宅の低い門扉をあけて玄関へいくと、その音を聞きつけた母さんは毎晩俺をむかえに飛んでくる。

「真白、おかえりなさい。今日も遅かったね、部活動？」

「うん、ただいま」

「美術部、楽しいの？」

靴を脱ぐ俺の顔色を注意深くうかがって、不安げに訊いてくるのは母の常だ。

「楽しいよ。今日も文化祭のために絵を描いた」

にっこりと母親にまで愛想笑いをするようになったのは、いったいいつからだったろう。

「そう、楽しいんならよかった。夕飯できてるから、着がえて手洗ってらっしゃいね」

母は過保護で、俺がいじめに遭ったり傷ついたりしていないかと危惧し続けている。

獣人なんてほかにも大勢いるよと説得しても警戒心をとかない母に反し、父のほうは自分の母親に羽が生えていたことや犬属の友人がいることで樂觀してくれているから救われる。

真白、という名前も、俺の背中の中、羽にちなんで母がつけてくれたものだと聞いている。

真白。なにも書かれていないノートのページじみた虚しさが、本当はあまり好きじゃない。

二階の部屋へ入って姿見の前に立ち、羽の下のチャックをふたつおろして制服を脱ぐ。チャックをあけてしまうと、どちらが前かうしろかわからないほど生地がばらばらで無残な見た目になる。

制服も普段着も、自分の羽の位置にあわせて切りこみを入れてもらわなければ着られない。調整が複雑で時間を要するから不便なうえに、通販の服やアーティストがつくる限定Tシャツなどは無論買えず、諦めることにも慣れている。糸がほつれると、縫いあわせてくれるのは母だった。『……服買うの面倒だから嫌い』と小学校三年生のときにぼやいて母を泣かせて以来、そんな本音を言うのもやめた。

満員電車では周囲に煙たがられる、睡眠時も一定の姿勢しかとれない、傷むと見窄らしい、そのくせ“綺麗、素敵”と執拗にもて囃される。そもそもこの羽は空を飛べるものでもない。ただの邪魔で厄介な代物だ。

「……ごめんなさい」

こんな身体に生まれなければ、母さんにも余計な世話や心労をかけさせなかったのにな。

初対面の人間が第一声で『真白君綺麗だね』と褒め称えることに幼少期から違和感を覚えていたが、“羽と自分の人格はべつだ”と決定的に理解したのは小学二年生のころだった。仲よくしていた友だちが陰で『真白といると自慢になるよな』と嗤（わら）っているのを見た。

勉強を教えてくれたり逆あがりの練習につきあってくれたりするいい奴で、一番の友だちだと思っていたのに、『羽って女子にも人気だもん。一緒にいると俺までモテるぜ』と喜ぶそいつにとって俺は単なるコマでしかなかった。

信用できる親友をつくろうと努力してもみたが、うまくいかないまま中学では逆に孤立した。色気づいてきた女子が『羽の彼氏って憧れるなあ』と誘惑めいた素ぶりを見せてくるにつれ、男子に嫉妬されるようになったのだ。

—おまえはいいよな、外見でモテるんだから。

恋愛は外見だけじゃないだろ、と苦笑いしながらも辟易した。

自分の評価は常に羽で、人格じゃなかった。好かれるのも羽なら嫌われるのも羽、つきあう価値があるかどうかジャッジされるのも羽。人格を見て対等に扱ってくれる人間が探しだせず、誰も信用できないから心もひらけない。他人にも自分にも失望したまま卒業した。

高校へ進学してからは周囲とただ穏便に接し、よく言えば博愛主義、悪く言えば淡泊、という曖昧なスタンスを保って諦観していたころ、高岡先生と会った。

—おまえ心の底から笑ったことある？

文化祭で休憩時間が一緒になったクラスメイト数人と、高岡先生のクラスの出店へ行って羽を褒めそやされたときだった。

—普通科一年の吉沢だよな、愛想笑いひきつってるぞ。美術科の奴らはおまえみたいなのにすぐ食いつくんだ、嫌なら言ってやって。我慢することないからな。

ともするとこれまでも何人かにはばれていたのかもしれないが、己のうちに秘めてきた嫌悪を暴かれた挙げ句、思慮をむけられたのは初めてで、複雑な恐怖と期待に襲われた。

文化祭が終わっても忘れられず、先生が顧問をしている美術部へ見学にいったのが三日後。

普通科で美術部に入る生徒は皆無で、先生も『珍しいな』と目をまるめていたし、部員もみんな訝しげで完全アウェイだったものの、先生は木彫りのコースターづくりに参加させてくれた。

芸術に明るくもなく、彫刻刀を触るの自体小学生の図工の授業以来で、不器用きわまりない俺が案の定掌を切ったら、先生は急いで止血して保健室へつれていってくれて、

—天使の血も赤いんだな。

と、俺の手に包帯を巻きながら苦笑した。

ばかにされたとは思わなかった。優しい目で安堵したように笑った先生は、俺のことも安心させるために冗談を言ってくれたんだと悟った。その瞬間、美術部へ入部することを決めた。そして、これは自分の初恋だとはっきり自覚した。

笑いたいです、と俺は思わず縋っていた。

—先生俺、心の底から笑いたいです。

先生に指摘されて、小学生のとき友だちだと信じていた相手と絶縁して以来、かけ値なしに笑った記憶がなかったことに気づいてしまったから。

—ばか。怪我して笑う奴がいるか。

でも先生が怒って顔をしかめたものだから、その拍子に笑ってしまった。たしかにそうだ。自分は怪我をして応急処置してもらっていたんだ。

笑う俺に呆れた先生は、手当てを終えて部室へ帰る道すがら、

—辛いなら、まずは趣味を見つけてみたらどうだ。好きなものができれば自然と笑えるようになるよ。

そこから他人との輪もひろがっていくだろうし。

と諭してくれた。文化祭でかわした会話を先生も憶えていてくれたんだ、と思った。

—好きなものならできました。

俺はそうこたえた。

「—こら吉沢っ」

洗っていた手を横からひっぱられて、我に返った。

「おまえなんで水で洗ってるんだ、手が真っ赤じゃないか」

高岡先生だ。

「冬場はお湯で洗うと荒れるんで、水で洗うようにしてるんです」

「あー……なるほど、おまえなりの知恵なわけね。でもかじかんでちゃ意味ないだろうが」

ほどほどにしなさい、と叱る先生が俺の手に絵の具で汚れたタオルをくれた。綺麗になるのが謎なそれで掌を拭いつつ、先生の左の掌にも意識を奪われる。

「先生はどうしたんですか、その手」

包帯が巻かれている。

「ああ、さっき準備室で探しものしてたら怪我したんだよ」

「まさか、あの噂の祟り、」

「ンなわけあるか」

凝視する俺の視線から逃げるように、先生が左手を身体の横に隠して離れていく。

「身体には気をつけてください」

「はいはい」

痛々しい包帯がちらつくのを尻目に、俺もキャンバスの前へ戻った。冷えた手で筆を持つ。

「吉沢、昼休みまでこんなところにいていいのか。淋しいだろ、ひとりぼっちで」

椅子に座って筆に絵の具をつけ始めると、先生が窓をしめながら訊ねてきた。

「文化祭の絵、描きたいんです」

「間にあいそうにない？」

「いえ、つくりかけのものがあると落ちつかないっていうか。終わるまで、なにかに追われてるような気分になって嫌で」

「ああ。授業中も絵のこと考えちゃうか」

「あ、いや、勉強はちゃんとしてますよ。ただ頭の隅にひっかかっているだけです」

相手が教師なうえに好きな人だと言葉選びに気をつかう。

先生はすべての窓をしめ終えて、唇に微苦笑を浮かべながら近づいてくる。

「吉沢はここを描いてるんだな」

キャンバスにあるのはあやふやな輪郭の下絵に色がのった、部室兼美術室だった。

「大事な場所だから決めました」

昼間の陽光が隙間なく満ちた室内には、木製の長机と椅子、水場のほかに、石膏像や未使用のイーゼルが綺麗に整頓しておかれており、壁には美術科の卒業生がおいていった絵が数点飾られている。物が多いのに雑然としていないのは、高岡先生の性格も関係しているんだと思う。先生と過ごせる、先生の気配が濃い場所。

「そう」

たったひと言の相づちには、素気ない軽さがあった。

「絵を描くのは好き？」

右うしろに先生がきて続けて問うてくる。俺は筆を持つ手が震えないよう慎重にこたえる。

「うまいとは思えないけど、好きです」

「そうか。吉沢は進学クラスだし、勉強の息抜きのつもりで楽しんで描いてほしいな。締め切りで焦らせてるなんて諏訪先生にばれたら、俺が怒られる」

諏訪先生はうちのクラスの担任だ。

「ちゃんと楽しいです」

「ン。絵以外になにかしたいことはあるか？ 日誌にも書いてたよな」

「俺は絵に不満はないですよ。でも、また木彫りの小物もつくってみたいです」

「おまえに彫刻刀は二度と持たせないよ」

先生の声がしかめっ面をしていたので、表情を見たくてふりむいたら予想どおりの苦い顔をしていた。俺は笑ってしまう。

怪我をしたとき先生が手近にあったタオルで瞬時に止血してくれたのを思い出す。驚いて動揺したり、判断力を失ったりは一切せず、タオルで俺の手を押さえたまま『保健室いってくるから』と部員に告げてこの美術室をでるまで、五分とかからなかった。

この人は教師の責任を心の底にしっかり刻んでいる人なんだ、と確信した瞬間だった。

その後木彫りのコースターは、中央に大きな星をかたどった簡単なデザインに変更して完成させ、先生にあげたのだが、いまま美術準備室でつかっていているのを知っている。

「あの日巻いてくれたタオルも、絵の具の染みがついてましたね」

さっき借りたタオルをさしだすと、先生が「洗っても落ちないんだよ」と受けとった。

「先生も授業以外に、趣味で絵を描いたりするんですか」

ふいに先生の口が自嘲めいたゆがみかたをした。

「描かない」

……え。訊いちゃいけないことだったんだろうか。

先生が会話を断ち切るように教卓へいってしまう。タオルを無造作に放るうしろ姿が急に冷たく感じられて、発せられる空気も自分の知らないどこかの大人の男のものみたいに思えた。

いまのいままで親しく会話をしていたのに、その一秒前の感覚がなぜかもうとり戻せない。

キャンバスにむかって重たい手を持ちあげ、絵の続きを描いた。声をかけていいのかもわからず、ただ沈黙が重たい。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>